様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２５年　６月１４日現在

機関番号：６４４０１
研究種目：基盤研究（Ｂ）
研究期間：2010 年度～2012 年度
課題番号：２２４０１０４６
研究課題名（和文）　中国の「国境文化」の人類学的研究

研究課題名（英文）　The Culture of Ethnic Groups in Border Areas of China.

研究代表者　塚田　誠之（TSUKADA Shigeyuki）
国立民族学博物館・研究戦略センター・教授
研究者番号：００２０７３３３

研究成果の概要（和文）：
中国南北の国境地域では、中央政府は国家統合のためにも経済的にも、国境地域をきわめて重視してきた。その国家の境界としての位置付けは民族の文化やアイデンティティ形成に多大な影響を及ぼしてきた。民族のネットワークによる結び付きが強く、文化の特徴が明確で、アイデンテンティが保たれ、独自の国境文化が形成されてきた。本研究では、中国南北の国境地域における民族文化の比較検討を通して、国境地域に独自に発展したであろう国境文化の核心を把握することを目的とした。
具体的には、人的移動や国家政策を含む国境地域の歴史的な変化、および 1980 年代以降現在までの国境に暮らす人々の社会や文化・アイデンティティ・ネットワークの動向の２点を中心として実地調査に基づく検討を行った。この研究を通して、国境文化の解明に接近し、民族紛争の未然の防止や人々の安全保障に寄与するであろう。

研究成果の概要（英文）：
The People's Republic of China has land borders with fourteen countries. The central government has regarded these regions as particularly important for national integration and the economy. In response, local peoples have formed and maintained tight ethnic networks to preserve their particular cultures and identities, and for mutual support. The purpose of this project was to compare the core elements of ethnic cultures in border areas of southern and northern China.
Firstly, we will consider ethnic mobility and historical changes in frontier cultures and societies since the delimitation of borders. Secondly, we will clarify main changes in their societies, cultures and identities since the 1980s to the present, through field research by project members. In this process, we will emphasize the understanding of local viewpoints. We trust that by comprehending the present situation of ethnic cultures in border areas of China, we can contribute to the prevention or reduction of ethnic conflicts and to human security in the contemporary world.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2010 年度	4,800,000	1,440,000	6,240,000
2011 年度	4,200,000	1,260,000	5,460,000
2012 年度	4,600,000	1,380,000	5,980,000
総　計	13,600,000	4,080,000	17,680,000

研究分野：歴史人類学
科研費の分科・細目：文化人類学・民俗学
キーワード：中国、南北、国境、文化、政策、ネットワーク、アイデンティティ、山地と平地

１．研究開始当初の背景

中国は陸上で14カ国もの隣接国と国境を接している。人為的に区切られた国境は、人々の生活圏を分断して形成されてきた。国境はウイグル・チベットなどに見られるように往々、民族問題の火種になってきた。また、国境地域はエネルギー資源の宝庫であり、経済圏が形成されてきた。中央政府は国家統合のためにも、国境地域をきわめて重視してきた。その国家の境界としての位置付けは民族の文化やアイデンティティ形成に多大な影響を及ぼしてきた。国境地域では、民族のネットワークによる結び付きが強く、文化の特徴が明確で、アイデンテンティが保たれ、独自の国境文化が形成されてきた。こうした国境文化を理解することが目前の急務である。

２．研究の目的

本研究は、中国南北の国境地域における民族文化の比較検討を通じて、国境地域の文化の核心を理解するものである。

３．研究の方法

国境地域に居住する民族の位置付けは、中国では政治的な色彩を帯びがちである。本研究は第三者的立場から極力客観的な姿勢で、現地での調査と討議によって検討する。中国の国境地域のなかで、北部と南部とでは環境が異なる。さらに山地民と平地民との違いもある。こうした居住地の環境の相異の比較にも留意して検討を行う。

４．研究成果

研究代表者ならびに研究分担者６名が、現地調査や現地討議を実施し、研究報告論文を完成させた。主要な論点は次の通りである。

（１）国境地域における人的移動、国境の画定を含む国家の統治政策の歴史的な変化および人々に与えた影響。

中国・ミャンマー国境地域における移動について、長谷川清は、20 世紀初以来、漢族が大量に移住した経緯を明らかにした。それら漢族は、交易・軍事・農業と関わっていた。ミャンマー産のヒスイの交易ルートを商業移民が押さえ、現地の経済権を掌握した。軍事移民や農民は国境の農場等に入植し現地人を圧倒した。また、中国・ベトナム国境地域について、塚田誠之は、ベトナムがフランスの統治下にあった時代においては、住居の移転を含め人々が自由に往来し、中国人がベトナムに耕地を所有するほどであったのが、人民共和国成立以降、自由な移動に制約が加えられた。ただし、国境線がより厳密になったのは 1979 年の中越戦争以降である。それでも、親戚や友人との冠婚葬祭や年中行事の際には国境の人々はかなり自由に往来することが可能であった。樫永真佐夫は、ベトナムとラオスの国境地域のターイ族「黒タイ」について、インドシナ戦争後の国境画定によって、ベトナムからラオスに歴史的に移住したものがラオス国民となったこと、両者の交流があるものの、ベトナム・ラオスでそれぞれの国の政策や主体民族の文化の影響を受けたこと、国境を隔てて同じ民族の文化の統合を指向する現象は、まだ表れていないことを明らかにした。

他方、中国北方の新疆では、大野旭によると、中国政府が「古くから我が国の領土」である点を強調し、政府が政治的なメッセージ性の強い挿絵入りの「小児書」を用いて住民に対して愛国主義教育を行っている現状を明らかにした。国境に住む人々は多重の帰属意識を持ち、その時々の政治情勢と国際関係の変動によって、歴史的に振り子のように揺れ動いてきたのであるが、政府は中華ナショナリズムを形成強化するような教育をし、歴史的な材料を政治的に利用して、少数民族の対政府への反乱は悪で、鎮圧行為は善だとしてきた。

研究を通じて、中国南部と北部との共通点や相違点が明らかにされた。北部の国境は南部と比較すると閉鎖的で、人々が国境線を相対化して往来することに制約が見られた。また政府は中国への統合政策を強化してきたが、とくに北部では歴史を素材に愛国主義教育を進めている。南部でも、国境が厳然として存在し続け、時には国境によって分断された同じ民族が交流を持ちにくい場合も見られたが、国境を越える人的流動の激しい状況下で、北部よりは人々の往来が見られている。

なお、武内房司は 19 世紀末にベトナム西北部において強大な勢力を誇り、国境を跨いで中国王朝とも結びついた豪族が、20 世紀以降いかに宗主国フランスによって取り込まれていくかについて史料から明らかにした。

（２）1980 年代以降現在までの国境に暮らす人々の社会や文化・アイデンティティ・ネットワークの動向

中国・ベトナム国境地域の人々のネットワークについて、塚田誠之は、家族の一員としての待遇を受けた「ラオトン」に注目し、そ

れが結婚式や葬式、長寿祝い、家の新築祝い、年中行事、定期市などの機会に往来しあったこと、ラオトンが家族同様に見做されていたことは、ベトナム側でとくに盛大な長寿祝いの場合の礼物や儀礼の際の位置や呼称にも現れていることを明らかにした。そのうえで、個人的な関係が基本であること、ラオトンを持つ目的について、中国側で実用・実利的側面が重視され、ベトナム側では感情的側面が重視されがちで、両国の間には差異が見られること、その差異には両国民の思考様式の違い、ひいては民族性の違いが反映されていることを明らかにした。

また、近年、中国側で出稼ぎ移住による若年層人口の国境地域からの流出、また経済発展などにともない社会の風潮が変化し、若者層のラオトンに対する意識が急速に変化していることをも明らかにした。

中国・ミャンマー国境地域について、長谷川清は、1980 年代に、国境貿易ブームで新来移民が殺到したこと、とくに玉・ヒスイ等の宝石の貿易･加工に従事する人の 80%以上が中国各地から移住し、ミャンマーからの移民も含めて、国境地域の地方経済の基盤を形成し、それら外地人が家族・親族や同郷出身者のネットワークを形成してきたこと、都市化にともない新来移民が開発計画や土地活用の受益者になって、元からの住民のタイ族農民が土地を喪失している現状を明らかにした。

樫永真佐夫は、ベトナム･ラオス国境間に、長距離の交通網の整備とそれにともなう人、モノ、情報の移動が増大していること、そしてそのことが部分的には双方の黒タイの生活に影響しているが、むしろ双方の黒タイの文化的差異をはっきり認識する方向に傾き、国境を越えて双方が一体化するような文化の形成には至っていないこと、さらに急速な近代化による生活環境の変化が、双方の間で伝統文化の保存を指向する文化運動を刺激し、在地性の価値の上昇という価値観の変化を促していることを明らかにした。具体的にはベトナム側の黒タイのもとでは養豚業が盛行している。

松本ますみは、雲南の回民集居地域におけるイスラームと中阿学校（中国のアラビア語教育地点）の動向について、熱心な地とそうでない地が見られること、熱心な場所は、過去の大虐殺・被弾圧の記憶を新たにし、それをイスラーム復興・回帰へのバネとし、中国各地からの学生を広く受け入れ、教員、卒業生の幅広いムスリム・ネットワークを駆使し、宗教活動を活性化させていることを明らかにした。また、こうした中阿学校は、宗教的エスニシティである回族の抱える問題が凝縮され透けて見える場所であるが、最近の現象として、1．急激な世俗化と知識の形骸化、2．（世俗的）高学歴化。3．都市への人口の移動、4．婚姻問題と漢化の危機、5．計画生育政策にともなう宗教教育機関進学者の相対的少なさ、6．経済的格差解消への欲求からのアラビア語学習、宗教への回帰、7．相対的弱者である回族、特に女性のセーフティネットが顕著にみられることを明らかにした。現代的な環境の下で、ムスリムの人々は世俗化と原点回帰のはざまで揺れ動いている。

吉野晃は、移住生活を続けてきた山地民ユーミエン（ヤオ）にとって、タイで初めての固定的祭祀施設として、伝説上の祖先の「盤王」を祭る中国式の「廟」を建設していること、そのことはユーミエンにとって民族アイデンティティの表出、すなわち祖先を救った「盤王」に自分たちも救われたいという指向の表れであること、「廟」の出現には中国との国境を越えるユーミエン・ネットワークが関わっていること、さらに従来には見られなかった女性が積極的に「盤王」を祀る儀礼に参加する現象が見られることを明らかにした。

このように 1980 年代以降、とくに南部において国境に暮らす人々のネットワークの活性化、都市化、宗教（ムスリム）の世俗化や漢化が顕著である。山地・平地を問わず、そうしたなかでの自己のアイデンティティを見直すための宗教的な原点回帰の運動、祖先を祀る活動、伝統文化の保存を指向する文化運動の動きが見られる。

研究を通じて、国境地域に暮らす人々のもとでの社会・文化やネットワークの実態、民族のアイデンティティの動きが明らかにされた。国境地域は政治的に不安定で、人の流動性が激しい。不安定な立場に置かれた人々が安定や精神的なよりどころを求めて独自の「国境文化」を形成し、自己のアイデンティティや文化を形成し続けてきたのである。こうした国境地域とそこに暮らす人々に注視し続ける必要がある

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 26　件）

<u>塚田誠之</u>「中国における民族文化の資源化とポリティクスに関する中間報告」『民博通信』136 号、査読有、国立民族学博物館、14-15 頁、2012。

<u>塚田誠之</u>「漢族と非漢族との相互影響について――広西の「蔗園人」の習俗に関する一考察」査読無、瀬川昌久編『近現代中国における民族認識の人類学』昭和堂、73-104 頁、2012。

塚田誠之「有関壮族年齢組（朋友）的考察」『広西民族大学学報（哲学社会科学版）』第 33 巻第 1 期、査読有、85-92 頁、2011。
塚田誠之「中国における諸民族の文化資源を考える」『民博通信』132 号、査読有、国立民族学博物館、20-21 頁、2011。
楊海英「沙甸村の殉教者記念碑」『中国 21』Vol.37、査読無、227-234 頁、2012。
楊海英「殖民地支配と大量虐殺、そして文化的ジェノサイド―中国の民族問題研究への新視座」『思想』1060、査読無、140-155 頁、2012。
楊海英「“中華民族”概念的再創造和蒙古民族史的再改写」『人文論集』（静岡大学人文学部）　61 巻 1･2 号、査読無、1-14 頁、2011。
楊海英「西部大開発と文化的ジェノサイド」、『中国 21』Vol.34、査読無、117-134 頁、2011。
松本ますみ「上海の大衆雑誌『良友』画報にあらわれた日中戦争時の日本・日本人表象」『敬和学園大学人文社会科学研究所年報』10、査読無、15-34 頁、2012。
松本ますみ「回族の民族教育と生活実態に関する一考察」『中国朝鮮族と回族の民族教育と民族アイデンティティ形成に関する総合的研究』（研究代表者：松本ますみ）平成 20～23 年度日本学術研究界科学研究費補助金　基盤研究(B)課題番号 20320113 研究成果報告書、査読無、2012 年 3 月、250－277 頁、2012。
松本ますみ Matsumoto, Masumi and Shimbo, Atsuko. “Islamic Education in China: Triple discrimination and the challenge of Hui Women’s madrasas”, in Sakurai Keiko, Fariba Adelkhah eds, *The Moral Economy of Madrasa* Routledge, 85-102、査読有、2011.
松本ますみ「孫中山の「徹底した民族主義」－近代的統一への幻想―」王柯編『辛亥革命と日本』藤原書店、査読無、212－236 頁、2011。
松本ますみ「もう一つの女性解放と開発に向けての選択？：中国における再イスラーム化と女学」『女性・戦争・人権』第 11 号、査読有 89－116 頁、2011。
松本ますみ「近代雲南ムスリムのイスラーム改革と変容するアイデンティティ」塚田誠之編『中国国境地域の移動と交流』有志舎、査読無、206-236 頁、2010。　（中国語版松本真澄　涂華忠訳「近現代雲南回族的伊斯蘭改革与認同転型」『雲南回族研究』No. 2, 2011 年、30-44 頁）
松本ますみ「見知らぬ民を「知る」ことと「仲間」と考えること：『良友』画報に見る西北少数民族の表象」『近きに在りて』58、査読無、2-18 頁、2010。
長谷川清「少数民族教育と中華民族多元一体構造論―雲南・徳宏タイ族の学校教育の事例から」瀬川昌久編『近現代中国における民族認識の人類学』昭和堂、査読無、168-203 頁、2012
長谷川清「中国・ビルマ国境地域の仏教復興と儀礼の再活性化―雲南徳宏州、タイ族の事例から」鈴木正崇編『東アジアにおける宗教文化の再構築』風響社、査読無、111-145頁、2010。
吉野晃「廟と女性シャマン―タイ北部、ユーミエン(ヤオ)の新たな宗教現象に関する調査の中間報告―」『東京学藝大学紀要　人文社会科学系Ⅱ』64 巻、査読無、115-123 頁、2013。
吉野晃「タイ北部、ユーミエン(ヤオ)の船送り」『国際シンポジウム報告書Ⅲ　“カラダ”が語る人類文化―形質から文化まで―』（国際常民文化研究機構・神奈川大学常民文化研究所）、査読無、141-147 頁、2012。
吉野晃「〈掛三台燈〉の構造と変差：タイ、ラオス、中国湖南省藍山県のユーミエンにおける〈掛燈〉の比較研究」瑶族文化研究所通訊（神奈川大学ヤオ族文化　研究所）3 号、査読無、35-40 頁、2011
吉野晃「タイ北部におけるユーミエン(ヤオ)の儀礼体系と文化復興運動」鈴木正崇編『東アジアにおける宗教文化の再構築』風響社、査読無、273-299頁、2010。
武内房司「「宝山奇書」考――中国的メシアニズムとベトナム南部民衆宗教世界」武内房司編『越境する近代東アジアの民衆宗教――中国、台湾、香港、ベトナム、そして日本』明石書店、査読無、23-36 頁、2011。
武内房司「地方統治官と辺疆行政―十九世紀前半期，中国雲南・ベトナム西北辺疆社会を中心に―」山本英史編『近世の海域世界と地方統治』、汲古書院、査読無、171-201 頁、2010。
武内房司「ヴェトナム国民党と雲南――滇越鉄路と越境するナショナリズム」『東洋史研究』69 巻 1 号、査読有、92-122 頁、2010。
樫永真佐夫「東南アジア少数民族の年代記と歴史研究――ベトナムにおける黒タイ年代記の分析から」『歴史と地理―世界史の研究』226 巻、査読無、1-15 頁、2011
樫永真佐夫「フィールドワークにおける人間関係」『民博通信』130 号、査読有、国立民族学博物館、2-7 頁、2010。

〔学会発表〕（計 17　件）
塚田誠之「チワン族の繡球文化―その実践とシンボリズム―」国際シンポジウム「グローカルの中の文化伝承」、国立民族学博物館、2011 年 11 月 26 日、大阪府。
塚田誠之「中國西南地區族群的遷徙與交流」第三届「族群、歴史與地域社會」國際學術

研討會、中央研究院臺灣史研究所、臺灣、2011 年 9 月 23 日、臺灣。
塚田誠之"Interaction between the Zhuang and the Nung in the Chinese-Vietnamese Border Area,their Networks and Characteristics of Sociey" : International Conference : Ethnic Interaction in the Context of Grobalization in Southwest China and its Relationship with Southeast Asia,YunnnanUniv.kunming,China.(2011.6.18)、中国
楊海英「中国文化大革命とモンゴル人大量虐殺事件－民族問題とジェノサイドの関連性」石田勇治東京大学教授代表「ジェノサイド研究の展開」、東京大学(駒場キャンパス)、2010 年 12 月 19 日、東京都。
楊海英「中国文化大革命とモンゴル人大量虐殺運動―民族問題の本質―」長崎純心大学比較文化学科公開講座（第４回地理歴史教育研修会）、長崎歴史文化博物館、2010 年
11 月 20 日、長崎県。
楊海英「アジア内陸部における自然と文化交流―文明論的認識の再検討と再構築」静岡大学哲学会、2010年11月３日、静岡県。
楊海英「モンゴルがもたらしたイスラーム、モンゴルから離れるイスラーム」、日本モンゴル学会、桜美林大学、2010 年５月 15 日、東京都。
松本ますみ"Why was Persian Learning Excluded?---Secularization and Modernization of Islam in China", Panel 164, Chinese Muslims and the Arabic Language: Authority, Authenticity, and Communication—Sponsored by China and Inner Asian Council, March 22, 2013, *Association for Asian Studies, 2013 Annual Conference* at Manchester Grand Hyatt, San Diego, U.S.米国
松本ますみ「回族の省境・国境を越えた移動とアイデンティティ」、国際シンポジウム「越境する中国のエスニック・マイノリティ：朝鮮族の場合」、早稲田大学、2012 年 3 月 24 日、東京都。
松本ますみ「1930 年代中国ムスリムの国際関係認識と衛教：イスラーム雑誌にみる世界情勢」、イスラーム地域研究　上智大学拠点公開研究会「アジアのムスリムと近代：1920～1930 年代の出版物を資料として」、2012 年 1 月 29 日、東京都。
松本ますみ「信仰深さによる抵抗：イスラーム教育を受けた回族女性」、中国ムスリム研究会 10 周年記念大会シンポジウム、早稲田大学、2011 年 12 月 18 日、東京都。
松本ますみ「見えない人種と中国国民統合のポリティクス：『中華大家庭』表象のエスニシティとジェンダー」、京都大学人文科学研究所人種研究会、京都大学人文科学研究所、2011 年 12 月 3 日、京都府。
松本ますみ「中国西北とイスラーム世界を結ぶ結節点、義烏の移民ムスリムたち」第６回 CIAS 談話会「移動がうみだす地域を考える―Asian Muslim の視点から」、京都大学地域研究統合情報センター、2011 年１月 21 日、京都府。
松本ますみ「佐久間貞次郎対中国伊斯蘭的活動和上海穆斯林：圍繞着一個亜州主義者的考察」、
"Nanjing University-Harvard-Yenching, Fourth Dialogue between Chinese and Islamic Civilizations,"Nanjing University, Nanjing, China、(2010. 6.11-12)中国
吉野晃「タイ北部、ユーミエン(ヤオ)の船送り」国際常民文化研究機構第３回国際シンポジウム「カラダが語る人類文化―形質から文化まで―」、横浜市、神奈川大学横浜キャンパス、2011 年 12 月 11 日、神奈川県。
吉野晃「〈掛燈〉儀礼の構造と差異：タイと湖南省藍山県のミエンにおける〈掛燈〉儀礼の比較」、神奈川大学ヤオ族文化研究所　ヤオ族伝統文献研究国際シンポジウム、神奈川大学横浜キャンパス、2011 年 11 月 23 日、神奈川県。
吉野晃「ミエン社会の変容と私の研究」南山大学人類学博物館オープンリサーチセンター人類学部会シンポジウム「タイ北部山地民の過去・現在・未来」南山大学名古屋キャンパス、2011 年 10 月 16 日、愛知県。
武内房司「従西江走廊看十九世紀前期的中越関係--以雲南和越南西北部傣族社会為中心的考察」香港・中文大学，香港・科技大学，中国・中山大学主催『「明清帝國的建構與中國西南土著社會的演變」國際學術研討會』、中国、広州、中山大学、2010 年 6 月 20 日、中国。
〔図書〕（計 12　件）
塚田誠之『西南中国少数民族の文化資源の"いま"』（国立民族学博物館調査報告 109）、国立民族学博物館、142 頁、2013。
楊海英 *Ulanhu, A Nationalist Persecuted by the Chinese Communists — Mongolian Genocide during the Chinese Cultural Revolution* (afro-eurasian inner dry land civilization collection 5),Comparative Studies of Humanities and Social Sciences Graduate School of Letters, Nagoya University,pp.102. 2013。
楊海英『王朝から〈国民国家〉へ―清朝崩壊 100 周年』（『アジア遊学』148）勉誠出版、148 頁、2011。
楊海英『モンゴル人ジェノサイドに関する基礎資料４－毒草とされた民族自決の理論』(内モンゴルの文化大革命 4)、風響社、936 頁、

2011。
楊海英『モンゴル人ジェノサイドに関する基礎資料 3―打倒ウラーンフー(烏蘭夫)』（内モンゴルの文化大革命３）、風響社、1087 頁、2011。
楊海英『続　墓標なき草原―内モンゴルにおける文化大革命・虐殺の記録』岩波書店、336 頁、2011。
松本ますみ『中国朝鮮族と回族の民族教育と民族アイデンティティ形成に関する総合的研究』（日本学術振興会科学研究費補助金・基盤研究（B）報告書、研究課題番号 20320113、研究代表者　松本ますみ）、283 頁、2012。
松本ますみ『イスラームへの回帰：中国のムスリマたち』山川出版社、113 頁、2010。
武内房司編 2012『アジアと日本（日記に読む近代日本５）』吉川弘文館、272 頁、2012。
武内房司編『越境する近代東アジアの民衆宗教――中国、台湾、香港、ベトナム、そして日本』明石書店、373 頁、2011。
樫永真佐夫『黒タイ歌謡「ソン・チュー・ソン・サオ」――村のくらしと恋』雄山閣、235 頁、2013。
樫永真佐夫『黒タイ年代記――「タイ・プー・サック」』雄山閣、163 頁、2011。

〔産業財産権〕
○出願状況（計　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
塚田　誠之（TSUKADA SHIGEYUKI）
国立民族学博物館・研究戦略センター・教授
研究者番号：00207333

(2)研究分担者

大野　旭（楊　海英）（OHNO AKIRA＜YANG HAIYING＞）
静岡大学人文社会学部・教授
研究者番号：40278651
長谷川　清（HASEGAWA KIYOSHI）
文教大学文学部・教授
研究者番号：70208429
吉野　晃（YOSHINO AKIRA）
東京学芸大学教育学部・教授
研究者番号：60230786
松本　ますみ（MATSUMOTO MASUMI）
敬和学園大学人文学部・教授
研究者番号：30308564
武内　房司（TAKEUCHI FUSAJI）
学習院大学文学部・教授
研究者番号：30179618
樫永　真佐夫（KASHINAGA MASAO）
国立民族学博物館研究戦略センター・准教授
研究者番号：10342643

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：